

インタートワイン・アライアンス

講師：マイク・ヴェッター（インタートワイン・アライアンス エグゼクティブ・ディレクター）

日時：2013年8月22日（木）

記入者：大阪府貝塚市 七野司

ポートランドは都市部でありながら、多くの自然が残っているまちである。自然は声を出さないがまちの重要なステークホルダーである。人間中心でなく、生き物が住んでいる生き物域を使って地域を指したほうが良いのではないか。ポートランドの生き物域を考えたときに、ポートランドの約7400平方キロメートルの生物多様性と生態系の保全と復元とおこなっているインタートワイン・アライアンスの存在は非常に大きなものである。そのインタートワイン・アライアンスのエグゼクティブ・ディレクターであるマイク・ヴェッター氏のお話を聞かせていただいた。

### インタートワイン・アライアンスの基本理念

いかに少人数で大きなことを成し遂げるかが課題であると考えている。ソーシャルキャピタル（人と人とのつながり）を広げていくのに、ビールを使うのはあながち間違っていないかも知れない。

インタートワインのコンセプトはシンプルだが説明しにくい。端的に言うと、リーダーが協力する場である。6年前にNPOになりスタートした。リーダーシップには、権限を持っているリーダーシップとコラボレーションしながらのリーダーシップがあり、インタートワインは後者のリーダーシップである。28の団体からスタートし、現在は100を超えるパートナーがいる。

インタートワインのコアミッションは「投資」と「巻き込み」である。都会の人が自然にいかにか接するか、自然システムの中にいかにか溶け込むか、都会の中に森林のようなものを残すことができるか、コミュニティに対して自然がどうやって関わるか、そういったことに自然、交通、教育、健康を通じた見方をしている。そういった見方をして活動することで幅広い人たちにコネクションすることができ、それが重要であると考えている。また、投資の面で考えると財源を得る幅が広がる。

自然に対するポートランドの動きは他に比べて革新的と言われるがそれでもスローであると考えている。我々は連合体を組んで投資しやすくする。プロジェクトの目的を明確に人に伝えることが重要で、連合体に参画している人が説得力を持てばお金が入りやすくなる。リーダー（公選）、市民リーダーにプライオリティをわかってもらうことが重要である。

自然保護の計画を州レベルでされると細かいところが見過ごされてしまう。実際の自然は細かく分散しているので、保護すべきところが無いように思われてしまう。高さ30m以上の木を地図上にプロットしたのを見るとまちにはほとんど樹木がないように感じてしま

うかもしれないが、高さ 5m 以上の木をプロットしたのを見るとまさに樹木が結構あることがわかる。つまり地域レベルに細かく自然を見る必要があるのである。

インタートワインは自分たちで連合を作り、プロを集め、自然と都市に合うコラボレーションのプランを作ってきたのである。

### 「投資」と「巻き込み」

具体事例から、インタートワインのコアミッションである「投資」と「巻き込み」について述べる。37 のグループそれぞれが市民に似たような情報を提供している非効率的な現状があり、それを 1 つにまとめたウェブサイトを作った。さまざまな団体によって管理されている公園の標識も、それぞれのブランドを保ちながら新しいものにした。

多様ではあるがみんな同じ自然を共有し愛しているために、そういったことに「投資」ができるのである。

インタートワインの活動はメトロの一環としてスタートした。個別の相談に対応するスタイルから、コラボティブなスタイルに変えるには考える必要があった。いろんな団体や協議会とコラボティブするほうが良いと、まずは自分たちで納得しなければならなかった。そして、メトロとしてはコラボティブのほうが良いのか決断しなければならなかった。もう一つの決断は多くの権力をシェアすること、それは結果もシェアしないといけない、そこに躊躇があった。議論がなされていた時に私はメトロのチーフだった。議論を重ね、ついに現在のインタートワインが誕生し、いろんな団体や協議会に対する「巻き込み」が本格的に始まったのである。

ここで、いくつかの質問のやりとりがあったので、以下に記す。

Q 今後、インタートワインの取り組みを外に広げていこうと考えているのか。

A まだまだ若い組織なので、これからわかのように広がっていこうと考えている。中心にはリーダーがいて、外側に広がって多くの人に活動の内容を知ってもらう。まだまだ時間はかかると思う。インタートワインを一般の人に知ってもらう必要があるか内部で議論することがある。我々の目的はインタートワインのキャンペーンではなく、自然に対するキャンペーンである。少しずつ広がっていると思う。

Q 組織内でインタートワインとしての思いを継続していくために、大事にしていることや具体的に行っていることはあるのか。

A 2つのゴールに向けて話し合いをしている。「投資」というものがいかに集められるか、住民をいかに「巻き込む」かが大原則で、各団体の細かい問題点には入りこまないようにしている。人の繋がりを育てるのは簡単ではないが、人を集めてやるのが大事。インタートワインの役割はさまざまなグループを集め、そのグループを取りまとめ、ファシリテ

ーションし、いろんな仕事をしている団体や人がやりやすいようにセットアップする裏方である。

Q インタートワインの2つのミッションが決まるまでどれくらいかかったか、そのプロセスを聞かせてほしい

A 私は7年関わっている。43年関わっている者もいる。人と人の繋がりをつくる、人と自然をつなぐ、それには時間がかかった。少人数のメンバーが月2回2時間集まって話し合いをするのを6年間続けた。また、リーダーシップについて頻繁に話し合った。資金力が実行力につながるのがリーダーシップだとは思いますが、では資金を使って自然と人をつなぐにはどうすべきかの議論に時間をかけた。

Q メトロから始まりインタートワインになったのは、より自由にやりたかったのが理由であったのか聞かせてほしい。

A メトロに残したほうが資金は安定するが、インタートワインは残らなかったと思う。インタートワインになったことで、全てのパートナーと公平に接していると思われるし、行政より身動きしやすくなった。

## 最後に

インフラ、自然がどうつながっているか考えるのが重要である。メトロは人が住むところ以外が自然という考え方だったが、それでは人と自然はつながらない。人と自然がつながっていないコンセプトでは、健康や自然を重要と思うことはできない。人が住んでいるところにいかに自然を持っていくか考えている。これは、広域の行政がお互いに協力しないといけない。インタートワインを作ったのは、協力体制をまず作りそして大きなことをやろうとしたからである。

人と自然がつながり、お互いが成長し続けるための挑戦である。